

自分の存在を肯定できない辛さの話

今ではあまり流行りませんが、私は小学生の頃からラジオが好きで、もう数十年になります。最近では全国のラジオ局がインターネットで聴けるうえに、聞き逃してもあとからネットで聴き直せるので便利です。先日もある番組を放送後に知ってあとから聴いて、心を揺さぶられる経験をしました。それは「SCRATCH 差別と平成」という番組でした。

あなたは2年ほど前に「やまゆり園」で起きた事件を覚えておいででしょうか？その番組は、重い障害のある息子さんを持つ放送記者が、その事を相手に明かしたうえで、収監中の被告に対し4回にわたってインタビューした内容が中心でした。「意思疎通のできない人間は社会のお荷物だから安楽死させなくてはならない」という容疑者の特異な考え方の背景には、彼自身が「社会の役に立たない人間である」という劣等感があり、あの事件を起こしたことで「役に立つ人間になれた」という、一種の達成感を得ていたようです。それを聞いた私は率直に「なるほどな」と思いました。番組でも触れていたように、昨今は「生産性の低い人間は要らない」「稼げない人を税金で養うなんて許せない」といった生産性至上主義が、ここまで人々の頭を支配してしまっていたのかと。でも、そういった考えの芽は、案外身近な人の中にもあることを私たちは知っています。

病院という場所には、病気やけがにより体に障害を負ったひと、生まれつき何らかの不自由を抱えた人がたくさん訪れます。そんな人々の中には、それまで何不自由なく暮らしていたのに、ある日発覚した病のために、身体的自由が奪われることに戸惑うことが少なくありません。そこではどうしても「こんな体のままで生きていたくない」「人の世話、家族の重荷になりたくない」という思いに囚われやすくなります。これらはともすると、一時の気の迷いとか落ち込みと片付けられてしまいがちです。でもこれは、その人が生きる意味そのものを問う根源的な問いかけなのです。自ら信じてきた価値観に縛られて、自分の存在さえ認められなくなるなんて、とても残酷なことです。

悲しいことに、完全さを失った自分を責める論理は、「役に立つこと」にしか価値を見出せないという点で、障害者の存在を敵視する論理と根本では同じです。価値観は多様でいいのですが、自分自身の存在価値を認めてあげられないことは、そのまま鋭い刃（やいば）となって、時には人を、時には自分をも傷つけるのですね。もしあなたが、社会の役に立たない、つまりお金を生み出さない人間には価値がないと考えるなら、上にあげた患者さん達は早々に居なくなるべきでしょうか？それが仮に自分でも、あなたの家族でもそうでしょうか？あなたも私も、いつ何時（なんどき）そのような立場になるか分かったものではないのに。いいえ誰もが、ただ年老いただけで人の世話にならなければならないというのに。

冒頭で紹介した番組では最後に「世の中には既に障害を持った人と、これから障害を持つ人の二つしかない。」と結んでいました。その通りだと思います。私たちにできることはいったい何なのでしょう？少なくとも私たちの仲間は、いま目の前に生きる意味を見失った人がいたら、わずかな力かもしれませんが、それを取り戻すためのお手伝いができればと思っています。それは仮に我が国で安楽死のプロセスが法制化されたとしても、必要な働きかけであり続けていくはずです。